

2023年は5月に新型コロナウイルスが5類感染症に移行し、飲み会も徐々にコロナ前に戻りつつあった。そんな年の瀬の12月16日(土)、埼玉県立川越高等学校OBの集まりが、東京の丸の内で開催された。初雁会ではない、「くすのき交流会」…各地区の初雁会はどこも高齢化が進み、若い世代の参加が少ない点

が悩みの種であるため、早稲田の稲門会や慶応の三田会のように、世代を超えたネットワークづくりが目的で、国の内外の幅広い分野で活躍中の同窓生が一堂に会し、先輩・後輩の枠を超え、母校くすのきの下で過ごした共通体験を基に、質の高い異業種交流などを通して多様な情報交換を行う会を初めて開催することになった。

各地区の初雁会から企画運営委員会に人員を輩出することになり、東松山初雁会からは私が委員として出ることになった。協同商事(COEDOビル)の朝霧重治氏(高44)も委員に名を連ねていた。

委員会は7月から計3回開催されたが、大半の準備は同窓会事務局長の金子保夫氏(高25)や事務局次長の野口孝氏(高25)にご尽力頂いた。多くの若い同窓生にも積極的に参加していただけるように、土曜日の午後

「切偲の友誼亦厚く」

— 第1回「くすのき交流会」開催記 —

高四一回 (平成元年卒) 山口和範氏

同窓会報同封のハガキがQRコードとなっていたが、どうも若い世代には同窓会報が実家留まりで届いていないようだったため、我々世代がSNS等を駆使してQRコードを広めた結果、参加者が一気に増えた。当日は総勢167人が参加。40〜70代を中心に、20代も2人参加した。高29回生が最多の15人、次いで高31回生が13人、我々高41回生はそれに次ぐ11人であった。参加者の内訳を見ると、大手企業、マスコミ、医師、弁護士等の士業、議員、公務員など錚々たる現役世代が集った。埼玉県副知事の砂川裕紀氏(高29)、東京慈恵会医科大学長の松藤千弥氏(高29)、毎日新聞社論説委員長福島良典氏(高34)などをはじめ、役員や管理職も多数参加していた。東松山初雁会からは野口孝事務局次長と私のほか、野崎信行氏(高28)や原徹氏(高31)も参加した。会は2部構成で、総合同会は元NHKアナウンサー・解説委員

で現在法政大学教授の山本浩氏(高24)が務めた。前半の開催セルモニーでは、同窓会長の根岸秋男氏(高29)、元副会長でこの交流会を提案した岩堀弘明氏(高8)、校長の小出和重氏による挨拶。その後、現役高校生の応援部が大太鼓を持ち込んで元気に演舞を披露した。参加者全員が今でも校歌や応援歌を口ずさめるのは、入学時に応援部の指導があったおかげである。後半の

交流会では、2015年のノーベル物理学賞受賞で東京大学卓越教授の梶田隆章氏(高29)が乾杯挨拶。明るいうちから飲むビールは背徳感もあつて美味しい。その後の自由交流ではカオスと化し、老若男「男」入り混じつての名刺交換や挨拶の嵐となった。同期との交流、部活の交流、同郷の交流、ビジネスに繋がりそうな交流、繋がらないような交流等、飲食は二の次に、様々な業種の先輩・同輩・後輩と知り合えた。同窓というのは不思議なもので、距離が一気に縮まる。そして終盤の校歌斉唱は、応援部OBで現役時代副団長の関根盛敏氏(高48)が力強くソングリーダーを務め、閉会挨拶は同窓会副会長で在京初雁会会長の横溝高至氏(高21)

が元日弁連副会長だけあつて熱く締めた。終了後のアンケートを見ると、大変満足とまあ満足が96%と、第1回くすのき交流会、大大大成功であった。冬至に近いこともあつて、会場を出ると外はもう辺り一面夜の街と化していた。丸の内は三菱村でオフィス街といったイメージもあるが、近年はブランドや飲食店も充実して土日も人が訪れる街、さらにこの時はイルミネーションも着飾って「Wellbeing」の街へと変化している。川高OBはその後、同期ごとに三々五々都内各所に散らばって2次会を催したようであり、我々高41回生もイルミネーションを見ながら有楽町のガード下まで歩いて飲んだ後、ホームグラウンドの池袋で3次会まで行つた。

「切徳の友誼亦厚く」(校歌2番)……このくすのき交流会を通じて、私のように刺激を受けた者も少なからずいたことと思う。これからも多くの川高OBが「高き響を初雁の城址の月と輝かせ」(校歌3番)ていきたい。

ところで最近、「共学化」の議論がかまびすしい。時代の変化かまびすしいが、ただ、同じくすのきの下で、女の子もいない中で青春の一時を過ごした同士だからこそ、このようなパワーや面白さや密な繋がりが創造できるのかもしれない。

追伸

今年(高41)は11月30日(土)に同じ会場で第2回を開催予定です。多くの皆様にご参加いただけたら幸甚です。



梶田隆章氏による乾杯挨拶